



旭川医科大学病院

卒後臨床研修センター通信

平成24年11月号
発行: 卒後臨床研修センター

センターの活動予定等

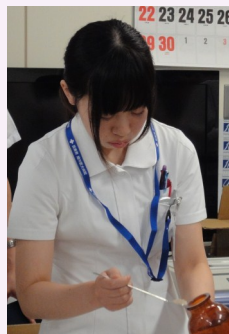
◆12月下旬 卒後臨床研修センター通信11月号発行



研修医体験談 第10回 櫻井由香里先生

1年目研修医の櫻井由香里です。気がつけば研修医となって半年が過ぎ、1年目のローテーションも折り返しを迎えています。この半年間の研修生活について少しお話ししたいと思います。

私は将来小児科に進むことになっており、4月から6月まで小児科をローテートしていました。まだ病棟のルールや電子カルテのシステムもよく分からず、知識以前の問題でつまづくことも多かったのですが、先生方に丁寧なご指導を賜り、実りの多い3ヶ月となりました。程よく放置し、自分の頭で考える時間をくれた上で、困っている頃に現れてフォローをくれる。研修医という立場に甘えるのではなく、主治医として患者さんに接するように導いてくれたように思います。



7月からはホームである小児科を出て、6ヶ月間の内科研修が始まりました。消化器内科、膠原病内科を2ヶ月ずつ研修し、現在は循環器内科をローテート中です。内科が始まる前は、「将来入局するわけじゃないから、手技とかはあんまりやらせてもらえないのかな…」などと思っていましたが、消化器内科では胃カメラや腹部エコーを丁寧に教えていただき、循環器内科では心エコーやカテーテル検査まで体験させていただいています。膠原病内科では、特定の手技はありませんでしたが、血液検査データの見方や重症患者さんの全身管理の方法をみっちり教えていただきました。当初は、小児科との違いに戸惑うことばかりで、重症な患者さんを前にすると目をそらしたくなることもしばしばでしたが、知識、経験ともに、自分の幅を広げることが出来たのではないかと思います。

よく、「大学病院の研修医は雑用で終わる」「大学病院では症例が偏る」という話を聞きますが、私はこの半年大学病院で研修してみて、それは違うのではないかなと思います。確かに、専門的な症例に偏る傾向はありますが、救急外来ではcommon diseaseもよくみえますし、雑用で終わるかどうかは自分次第です。旭川医大病院の研修は、やりたい、学びたいという気持ちさえあれば、それを尊重し伸ばしてくれるシステムだと思います。残りの研修期間も、自分に妥協をせず、言い訳をせず、目一杯様々なことを吸収したいと思っています。

【お問い合わせ先】 旭川医科大学病院 卒後臨床研修センター
〒078-8510 北海道旭川市緑が丘東2条1丁目1-1 TEL:0166-68-2198 FAX:0166-68-2199
E-mail: sotsugo@jimu.asahikawa-med.ac.jp
http://www.jimu.asahikawa-med.ac.jp/shomu/sotsugo/ ※ホームページもご覧ください

【報告事項】

①指導医講習会を開催しました

旭川医科大学では平成20年度から、毎年、指導医養成講習会を開催しています。今年は11月3日(土)～4日(日)の2日間に渡り、本学看護学科棟大講義室他で開催しました。本講習会は研修医の指導体制の充実及び質の確保を目的として開催しており、今回は22名の本学教員を含む35名の先生方がお忙しい中受講されました。



②第3回CPCを開催しました

11月28日(水)18:00から第3臨床講義室において第3回CPCを開催しました。今回は第3内科が担当で、検討題材はCronkhite-Canada症候群の一部検例でした。参加者は研修医7名、学生12名を含む計41名で、活発な質疑応答が執り行われました。残念ながら参加できなかった方で、参考資料などご希望される場合は、卒後臨床研修センター事務室(内線2198)までお問い合わせください。

母校の紹介 第11回 生化学講座機能分子科学分野

本講座では、Ca²⁺ポンプをその代表的メンバーとする『P型カチオン輸送ATPase』の分子作動機構について研究を進めている。現在ではその成果に基づき「細胞Ca²⁺代謝異常と病態」にも研究を進展させている。細胞膜や小胞体膜に存在するCa²⁺ポンプは、ATPを分解して取り出したエネルギーを利用して細胞質Ca²⁺を細胞外や小胞体内腔に汲み上げることにより、Ca²⁺による細胞機能調節、Ca²⁺シグナル形成、新規合成蛋白の修飾や細胞内輸送などの小胞体機能など、様々な細胞の営みや生存に基本的役割を果たしている。Ca²⁺ポンプの仲間にはNa⁺/K⁺ポンプや胃酸分泌を担うH⁺/K⁺ポンプ、ゴルジ体Ca²⁺/Mn²⁺ポンプなどがありそれぞれ特異的なカチオンの輸送を行っている。本講座ではCa²⁺ポンプを中心としたこれらポンプがどのような仕組みで作動して細胞のイオン環境を制御するか、そしてポンプ遺伝子異常がどのような異常をどのような機序で蛋白の発現と機能にもたらすかを明らかにし、さらにCa²⁺代謝異常による癌化、筋弛緩障害、異常角化(細胞間接着障害)、精神障害、感覚器官障害など様々な重篤な病態の発症機序を分子レベルから理解することを目標としている。Ca²⁺ポンプのエネルギー変換機序に関して最近我々が提出したスキームは生化学の代表的国際誌の表紙を飾り、また、Nature, Science, J. Biol. Chem. などにも我々の論文が多数引用されている。すべては地道に研究を展開し続けた成果であり、また講座構成メンバーのそれぞれの独特の学術的興味と高い能力そして努力の賜物である。今後も講座の各メンバーの研究者としての卓越した個性を活かしながら地道に研究を続け発展させていきたい。



(鈴木 裕)